

自分らしい生き方、応援します！

ソーレ・スコープ

第71号
2015.JANUARY

特集

理解されない苦しみ～性暴力～

DV防止啓発講演会

「傷のそばにたたずむ

～DVとトラウマを考える～」

☐ ソーレ・メールマガジン
「FROMソーレ」

講座情報を定期的にお届けします。

購読は無料！



▲ 登録はこちらから！

登録確認メールが届きます。
URLにアクセスして登録を完了
してください。



イラスト：「呼吸」山崎菜穂さん
(平成25年度ソーレ・イラストコンテスト佳作)

理解されない 苦しみ ～性暴力～

—「理解」

これが、私が願うたったひとつの、
とても強力な被害者への支援である。—

(『性犯罪被害にあうということ』小林美佳著より)

2000年8月、仕事帰りに性暴力被害に遭った小林美佳さんは、その後出版された著書の中で上のように述べています。この言葉には、仕事のかたわら、多くの被害者に寄り添い、支援を続けられている小林さんの強い想いが込められています。

もしもあなたの大切な人が性暴力被害に遭ってしまったとしたら、それを本人から聞かされたら、あなたはどんなことを思いますか。まずは犯人に対して強い憎悪感を抱くことでしょうか。さらにやり場のない怒りを「なぜそんな危ないところにいたの!?!」「なぜ逃げなかったの!?!」と被害者にぶつけたり、あるいは、「あんな時間にひとりで帰ってしまった自分が悪いんだ」と自分を責めたりする人もいるかもしれません。これが「二次被害」です。

被害者を思うあまり、誰も被害のことに触れようとしない、

「性暴力」という言葉を聞いたことがありますか。同意のない相手に対して強制的に、あるいは暴力や脅しを用いて行われる性行動のすべてを「性暴力」といいます。具体的には、レイプ(未遂を含む)、セクハラ、性的コメントや接近、人身売買、痴漢、性的虐待、強制わいせつ、性的搾取などがあり、自宅や職場など場所を問うものではありません。また、夫婦・恋人間であっても、本人の意思に反して強制的に行われる性行為は、暴力であり、犯罪です。

今回は、「女性に対する暴力」の中でも特に長期間にわたり被害者を苦しめる性暴力について考えてみましょう。

何も聞いてこない、避けるなど、周りの人から与えられる疎外感や、同情、憤りなどは、なおも深く被害者を傷つけてしまいます。

性暴力被害に遭い、最も傷ついているのは被害者だということを忘れないでください。心も体も深く傷つき、多くの被害者が自分は加害者によって汚されてしまったという感覚を覚えます。周囲の人のこうした反応は、被害に遭ったことを「恥ずかしいこと」「隠さなければいけないこと」と思い込ませ、誰にも言えず苦しめてしまうことにもなりかねません。

また、二次被害は、被害者の周囲の人々からだけでなく、犯罪を取り扱う警察や裁判所、医療機関などの関係者からも受けることがあります。

なぜこのような「二次被害」が生じるのでしょうか。

☐ ソーレ図書・情報資料室より

『性犯罪被害に あうということ』

(小林美佳／著
朝日新聞出版
2008年発行)



『性犯罪被害と たたかうということ』

(小林美佳／著
朝日新聞出版
2010年発行)



二次被害はなぜ起きる？

最も大きな原因は、性暴力の本質的なところにあります。被害者が性暴力を受けたことを声に出したとき、「なぜ、そんな危ないところにひとりで行ったの?」「そんな服装をするからよ」と被害者が落ち度を問われるのが、性暴力の特徴です。被害者は「自分は汚れてしまった」「そんなところにいた自分が悪いんだ」と自分を責め、声を上げづらい状況に陥ります。

知ってください！ 誤った「レイプ神話（強かん神話）」に



●性暴力の被害に遭うのは若い女性だけだと思いませんか。

小さな子どもや高齢者など、女性というだけであらゆる年代の方が被害に遭っています。また、被害者の2割は男性です。

●露出の多い服装をしていた被害者も悪いのでしょうか。

加害者は「大人しそうで、声をあげないだろう」という相手をターゲットにし、犯行は計画的に行われることが多いのです。また、たとえ被害者が露出の多い服装や挑発的な態度を取っていたとしても、性暴力を受ける理由はどこにもありません。

●女性には襲われたいという願望があるのでは？

「女性の“NO”は、本当は“YES”」など、さまざまなメディアを通して触れられる性情報には、売れるために作られた誤ったものも多く、このような誤解をしている人もいます。

●性暴力の加害者は見ず知らずの人だと思い込んでいませんか。

実は、加害者の過半数は顔見知りで、被害を訴えれば失業する、家を追い出されるかもしれないなど、社会的な立場を利用した犯行も少なくありません。また、まだ何も知らない小さな子どもに「これは秘密だよ」と言って聞かせ、繰り返される性暴力もあります。

●抵抗しなかったのなら同意の上だったのではないかと考えていませんか。

相手が複数、自分よりも力が強い、刃物などで脅される、「口外したら写真をばらまくぞ」と言われるなどの状態で誰にも知られたくない、何とか命だけは助かりたいという思いから、抵抗できなかった被害者の苦しい心情を理解してください。

●男性は性欲をコントロールできないいため、衝動的に犯してしまう？

いいえ。それは男性側を擁護するための言い訳に過ぎません。前述のとおり加害者はターゲットを選び、被害者が抵抗できないように、犯行が露呈しないように計画的に行っていることから、衝動的とはいえません。仮に性欲をコントロールできなかったとしても、それが性暴力をしても良いという理由にはなりません。

いかがでしょうか。知らず知らずのうちにあなたの中にある誤った認識に気付いた方も多いのではないのでしょうか。

性暴力の被害者がほかの犯罪被害者に比べ、その落ち度を問われることが多いのには、こうした社会全体にある性暴力に対する偏見や誤った認識が大きく影響していると考えられます。そして、それによって、被害者の心の回復が妨げられていることに気付いてください。

傷のそばにたたずむ ～DVとトラウマを考える～

毎年11月12日～25日の2週間は「女性に対する暴力をなくす運動」期間です。これに合わせてDV防止啓発講演会を開催しました。

今年度は、『傷を愛せるか』(大月書店)、『トラウマ』(岩波書店)等の著者の宮地尚子さんをお招きして、臨床医として最前線からのお話をうかがいました。



講師 宮地 尚子さん 11月22日(土) 13:30-15:30
(精神科医、一橋大学大学院社会学研究科教授、医学博士)

● 社会におけるDVの現状

私は臨床や女性センターでの面談を通してDV被害者と接するうちに、こんなひどい暴力が家の中で起きていて、しかもそれが個人や2人の間での問題と思われ、社会的な問題として捉えられていないことにとても驚きました。

DVには、身体的、精神的、社会的、経済的な暴力等があります。特に性的暴力については、恋人や夫婦間であれば性的な関係があることが当然とされているので、理解されにくく、本人も言えない状況があります。インターネットやスマートフォンの普及により、写真などの情報が脅しや復縁を迫る手段として使われることなど、さらに加害者にとって監視や遠隔操作しやすい状況になっています。昨年ようやくストーカー規制法が改正され、メールも規制の対象となりましたが、まだ若い人たちが利用するSNS*は入っていません。それほど、テクノロジーの進化に分析や対策が追いついていないという現状があります。

内閣府男女共同参画局の「男女間における暴力に関する調査」では、結婚したことがある女性のうち3分の1は配偶者からのDV被害を受けた経験があり、そのうち10人に1人は繰り返し被害を受けています。DV被害のうち、特に身体的な暴力に限っても、女性の約4分の1に被害経験があり、20人に1人が命の危険を感じるほどのひどい暴行を受けています。さらに100人に1人が命の危険を感じるほどの暴行を何度も受けているという結果が出ています。

*SNS…Facebook(フェイスブック)やLINE(ライン)などのソーシャル・ネットワーク・サービス

● トラウマとは

トラウマとは、心の傷のことです。この言葉は、1995年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件が起きたことをきっかけに日常的に使われるようになりました。

本来のトラウマ体験というのは衝撃的で通常の適応行動では対処できない、つまり心が耐えられないほどのことを言います。語られず隠されることが多く、ちょっと話題に出るだけでその場からいなくなったり、もうそんな話はしないでと思ったりします。特に私的で親密な事柄、性的内容などは語られにくくなります。

● DVはなぜ傷つくのか

DVはトラウマの中でも特殊です。本来傷ついた時にいたり合うはずの人から傷つけられるということが大きな問題です。例えば突然強盗に遭ったとします。それはとても怖い体験です。そして家に帰ると「とても怖かったですよ」と慰めてもらったり抱きしめてもらったり、いろんな形で回復していきます。

しかしDVの場合は逃げ場がありません。安全な場所、そこで支えてくれる人や、「怖かったですよ。でももう大丈夫だからね」と言ってくれる人がいる場所がありません。むしろ、そうあるべき場所に加害者がいるのです。健康な生活や回復をするための場所がないということです。

また、信頼を寄せる大切な人、愛している人から傷つけら

れることで、「愛情」の意味が混乱することもあります。愛情と支配を混同してしまうからです。「愛しているならなぜ僕のいうことを聞けないんだ」という風に相手に従うことが愛という言葉に換えられてしまう、相手の言うとおりにすることを愛だと言われてしまうからです。また、性的なかかわりを持つ人から傷つけられるという意味では、性の意味づけも混乱することがあります。

本来愛情というものは、お互いをいたわり合って相手が幸せになれるような状況を努力して作り合うものではないかと、少なくとも私は思っています。DVの当事者間では、この愛という言葉が、加害者にとって至極便利に使われています。

● DVの語りづらさ

トラウマは隠されて、あまり語られることがありません。親しい間柄になっても、自分の一番つらいことを話せないということは、とても苦しいことです。家の中では暴力的なことが起きているけれど、外では誰にも話さないで元気なふりをする、そうした二重生活が続くと、何が現実なのか判断がつかなくなる場合もあります。さらに、語られないことによって暴力や支配が長期化してしまうこともあります。

被害者が声を出すためには、自己尊重感や、他者・社会に対しての信頼感、時代や社会の状況、裁判での証言のためにも、語ったり書いたり表現することへの慣れが必要です。そして、聞いてくれる人がいるということ、被害者自身が声をあげることがほかの人の役に立つという感覚が持てることも大きな力になります。

● 支援者にできること

支援者の役割は、よい聞き手であることと、被害者の話を分かりやすい言葉でほかの人たちに伝える翻訳者であることです。そして、被害者が語ることを促すことも大事ですが、語れない状態にある人にどう向き合うかも重要です。心に傷を負っている状態で話せと言われてもつらいですね。何か

つらいことを抱えているということを分かってくれる人がそばにいるというだけで落ち着きませんか。支援者には「何かあったのかな」と感じられる知識が必要です。

そして、ただそばにいてくれる存在であること。これは実はとても難しいことで、人間って何かしたくなってしまうものなのです。それでも、逃げ出さない、ひかない、侵入しすぎないという距離のセンス、待つ力が求められます。それから、話をする気になったらいつでも聞いてくれるという感覚は、支援者のサインを読み取る力や安心感を持たせる包容力、タイミングを読む力から生まれてきます。

分かろうとしてくれる、聞いてくれるということもとても大事です。何でも知っている、分かっているという万能感ではなく、自分の限界を認識しながら共感する、忍耐力を持つ、規範にしばられないという感覚も重要です。

● DV支援の現場で

被害者が安心感を取り戻す、安全な場所を取り戻すことは、まず考えなくてはいけないDV支援のポイントです。それから、支援を継続するために、支援者も傷つくということを知っておいた方がいいです。支援者自身が傷ついて支援をやめることも、ひとつの選択肢として持っていていいと思いますが、突然やめてしまう、長続きしないサポートは、見捨てられ不安を被害者に与えやすくなります。

支援を継続するためには、支援者のセルフケアや、同じような支援をやっている人たちと相互サポートするということが重要です。休むことも大切な任務の一つです。休まなければ長続きしなくなりますから。ちゃんとした栄養と適度な運動、睡眠をとること、自分の弱さを認めて無理をしないなどもとても大事です。

傍観者でいる人たちともつながりを持ち、支援者を増やすことが、暴力に対して社会的な認識を高め、社会全体をもっと生きやすいものにするのではないのでしょうか。

毎日3万9,000人

「児童」のまま花嫁となっている女性の数
（「世界人口白書2014」UNFPA国連人口基金より）

いつの時代の話でしょうか。50年前？ 30年前？ いいえ、これはいま世界中で起きている実際の話です。社会的・文化的・宗教的な慣習などから、少女たちが早すぎる結婚を強いられる「児童婚」。そのうち3人に1人以上が15歳未満といます。この「児童婚」の背景にはどのような問題があるのでしょうか。

● 児童婚の現状

すべてのカップルと個人が、自分たちの子どもの数、出産間隔、および出産する時期を、責任をもって自由に決定でき、そのための情報と手段を得ることができるという基本的権利のことを、「セクシュアル・リプロダクティブ・ライツ（性と生殖に関する権利）」といいます。

しかし、アフリカと南アジア地域をはじめとする発展途上国では、少女のほぼ半数が18歳未満で結婚し、その大半がほとんどして妊娠しています。まだ子ども時代を過ごせたはずの少女たちは、精神的・肉体的・性的にも未熟なまま妊娠・出産を迎え、母親として妻として生きることを余儀なくされています。

また、10～14歳の女性の妊娠・出産による死亡率は、20歳代前半の5倍にもなります。発展途上国における15～19歳の女性の死亡原因の第2位は、妊娠・出産による合併症となっています（UNFPA国連人口基金）。

こうして児童婚によって少女たちは「子どもらしさ」だけでなく、学校生活や教育を受ける権利、将来の夢、ときには命をも奪われてしまいます。さらに、年齢のかけ離れた年上の男性との児童婚は、DVへと発展する割合も高くなります。性感染症やHIVの危険性も免れません。

● 連鎖する児童婚

なぜこのような重大な人権侵害である児童婚はなくなるのでしょうか。その背景には、貧困と慣習が大きく影響していると考えられます。貧困家庭では1人分の出費を減らすためや、より裕福な家庭と親族になり経済的援助をしてもらうために、年上の男性と結婚させたり、少女を結婚させる代わりに金品を受け取ったりする傾向にあります。また、結婚させることで少女はレイプなどの性暴力から守られるという考え方も根強く残っています。なぜなら、夫婦間での性暴力は犯罪と考えられていないからです。

また、「女の子に教育は必要ない」というジェンダー不平等による考え方も根強く、少女自身も虐待や搾取から逃れるために結婚を選ばざるを得ない状況も起こっています。「女の子だから」というだけで、決定権も選択肢も持てずに、将来への希望を抱けず、可能性も開けないまま、毎日3万9,000人、1分間に27人の少女たちが児童婚をさせられているのです。

教育を受ける権利を奪われた少女たちは自立するための収入を得ることもできないまま、幼い子どもを抱えながら子育てと家事労働に縛られて、どこへも逃げるできません。そしてその子どもたちもまた貧困によって児童婚を強いられるという連鎖は続いていきます。

● 日本はジェンダー平等か

多くの国で違法とされているにもかかわらず、現実にはなくならない児童婚や人身売買。これは発展途上国だけの問題ではありません。わたしたちの暮らす日本にも、売買春やセクハラ、マタハラなど、ジェンダー不平等による差別は根強く残っています。

世界経済フォーラムによると、日本のGGI（ジェンダー・ギャップ指数）はこうした発展途上国と並んで142カ国中104位となっています（2014年）。児童婚は、かたちを変えて日本にもあるといえるのではないのでしょうか。

暮らしにひとさじ エッセンス

Recipe レシピ

コーヒーかすを使ったエコ消臭

材 料

- ・ドリップコーヒーで使った後の豆
- ・あればお茶パック

用 途

【湿気のある状態のもの】

- ・お皿やタッパー（フタなし）などの容器に入れて冷蔵庫の匂い取りに。
- ・キッチンの三角コーナーや生ごみバケツの消臭に。
- ・庭先に撒いて猫避けに。

【乾燥させたもの】

- ・お茶パックに入れて、下駄箱・靴・お部屋の消臭に。



ひとことアドバイス！

コーヒーは生鮮食品です！新しいものをできるだけ新しいうちに賞味してください。
古くなったものは豆のままトイレやお部屋に置いてもオシャレに楽しめます。

静かにブクブクと泡立つ豆と、ゆっくりフィルターをつたって落ちる雫の音、あたり一面に立ち込めるコーヒーの香り…。丁寧に淹れられたコーヒーをゆっくりと味わう時間は、何にも替えがたい至福のときです。ほんとひと息ついた後は、コーヒーかすをエコに活用してみませんか。



ハルノ珈琲

☎088-847-5995 (FAX兼用)

住 所 〒781-0114

高知市十津3-1-19

定 休 日 毎週金曜日の午後(12:00～)

営業時間 8:30～19:00

月1回、クリスタルボウルのイベントをやっています！
※詳しくはFacebookで

レシピ提供 塩見美和さん (ハルノ珈琲 オーナー)

「ハルノ珈琲は、春野のどこにあるが？」とよく聞かれます。何となく春野ののほほんとした中でお店を持ちたいなあと思っていたことと、「ハルノ」という言葉の響きがかわいくてこの店名にしました。元々コーヒーが大好きで、いつもお気に入りのコーヒーショップへ行っては、マスターとコーヒー談義をしていました。そこでコーヒーは豆の種類だけでなく、焙煎のしかたでも全然違う味になるということを知り、35歳を過ぎたころからぼんやりと「コーヒー屋さんができたらいいなあ」と思うようになりました。

それから創業塾を2年間受講し、ほかにもいろんなセミナーで学びながら、少しずつ準備をしていきました。当時勤めていた会社には、「40歳で定年退職します！」と「自己定年宣言」をしていました。いざ本当に仕事を辞めるときには、「あれは本気やったがやねえ」と驚かれましたが(笑)。

オープンしてから4年とちょっと。分からないことが本当にたくさんありました。でも、これまでの経験は無駄じゃなかったと感じることもたくさんあります。苦手な接客も、コーヒーがお客さまとの距離を縮めてくれているような気がします。わたし好みのベストな状態のコーヒーを、お客さまが美味しいと言ってくれることが何よりの楽しみです。いつもそばにあって、気が付いたらもう飲み干している、そんなあまり主張しすぎない、けれどどこか存在感のあるコーヒーを淹れるよう心掛けています。

——小さな陽だまりのできる店内では、今日も焙煎されたコーヒー豆の香りに、塩見さんの明るい笑顔がブレンドされています。

講座のご案内

ソーレまつり 2015 無料

ソーレでつなぐ 地域のきずな
～自分らしく生きるために～

1月24日(土) ▶ 25日(日) 9:30～16:00

ワークショップ、ミニコンサート、バザー(24日)、ミニステージ(25日)など、ソーレ全館で楽しいイベントが盛りだくさん！
気軽にご参加ください♪

ソーレまつりイベント 参加費無料

0歳から6歳までの音楽劇「ももたろう」

「0歳からの音楽コンサート」がお届けする音楽劇。会場内は、泣いても、騒いでもOK！赤ちゃんも一緒にご家族で楽しめます。

日時 1月24日(土) 10:15～11:00(開場:10:00)

対象・定員 0歳～6歳の児童とその保護者70組

申込 往復はがきで受付中(1月14日(水)ソーレ必着)

共催 えがおプロジェクトMacotto(0歳からの音楽コンサート事務局)
問い合わせは、えがおプロジェクトMacotto井上まで(090-8975-1939)

- このほかにもさまざまな講座を開催しています。詳しくは、
ソーレホームページ・セミナーガイド(4月、10月発行)をご覧ください。
- お申し込み・お問い合わせはお電話でソーレ **(088) 873-9100** まで

施設利用のご案内



- 貸室利用時間
9:00～21:00
(土・日・月曜日9:00～17:00)
- 休館日
第2水曜日／祝日／(年末年始)12月29日～1月3日
- 図書・情報資料室
9:00～20:00(土・日・月曜日9:00～17:00)
※ただし登録カード発行及び再発行の受付は、17:00まで
- 相談室
9:00～12:00、13:00～17:00
(専用電話／088-873-9555)
※第2水曜日、祝日、12月29日～1月3日は休室です

無料託児付(6カ月～就学前児童・予約制)

働く女性のストレス・マネジメント ～もっとハッピーな毎日のために～

仕事や家庭で頑張っているあなた、疲れていませんか。日々のさまざまなストレスを知り、自分に合う対処法を見つけましょう。実践的なエクササイズも体験し、笑顔になれる3時間です。

日時 3月7日(土) 13:30～16:30

講師 森川早苗(株式会社えな・ヒューマンサポート代表取締役、臨床心理士、家族心理士)

参加費 500円 対象・定員 女性30名(先着順)

申込 2月10日(火)午前9時～電話にて

ハッピーキャリアセミナー

さわやかに伝える技術 ～自己表現トレーニング～ 無料

自分の感情は、言葉ですっきりと相手に伝わっているでしょうか。どんなにいい言葉でも、頭の中で思っているだけでは相手に伝わりません。この講座では、自己表現と効果的なコミュニケーションのスキルを学びます。

日時 2月14日(土)・15日(日) 10:00～16:00(全2回)

講師 松田知恵(雷門メンタルクリニック心理カウンセラー、
東京フェミニストセラピーカウンセラー)

参加費 2,000円 ※初回にお支払いください

対象・定員 女性30名(先着順) 申込 1月10日(土)午前9時～電話にて



◀イラスト：池上芽依さん「家族」
平成25年度ソーレ・イラスト
コンテストソーレ特別賞

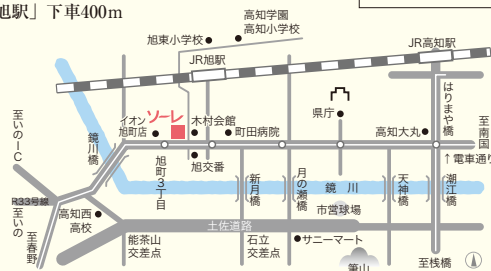
▶イラスト：小松玲さん「助け合う社会」
平成25年度ソーレ・イラスト
コンテストソーレ特別賞



●アクセス

電車…「旭町3丁目」下車100m
バス…「旭町3丁目」下車50～200m
JR…「旭駅」下車400m

駐車スペースが少ない
ため公共交通機関をご
利用のうえ、ご来館く
ださい。



発行 公益財団法人こうち男女共同参画社会づくり財団 Tel.088-873-9100 Fax.088-873-9292
〒780-0935 高知市旭町3丁目115番地 ホームページ <http://www.sole-kochi.or.jp> ・Eメール sole@sole-kochi.or.jp

発行日 平成27年1月10日